

A-79 と畜検査に際し検出された牛の 双口吸虫症について

西南女学院短大 ○大里 克夫

1. と畜検査によって廃棄される疾病のうち、その原因が寄生虫であることが非常に多い。食用に供される獣畜の寄生虫病は、公衆衛生上重要な問題である。本調査は、発育、感染病害等について未だ不明な点が多い牛双口吸虫症の実態を把握するために実施したものである。

2. 小倉と畜場、福岡食肉センターにおいてと畜検査に立会い、318 頭を検索した。

3. 双口吸虫の寄生を認めた牛は全検査頭数の37.7%である。寄生率を年令別に比較すると、年令が高くなるほど上昇するが、牛の品種別には差が認められない。

一頭あたりの双口吸虫寄生数は、100 匹程度がもっとも多く、大部分が1000匹以下だが、中には1万匹以上の寄生を認めた例もある。寄生部位は、第1胃に寄生する例がもっとも多く49.2%である。その他、食道溝、第2胃への寄生も多い。

双口吸虫の種類は、*F. elongatus*, *P. explanatum*, *P. cervi*, *P. orthocoelium* の4種であったが、1頭に1種類の寄生例が54.2%、2種の混合寄生が40.8%、3種が5.0%であった。双口吸虫の吸着部の胃壁には、イボ状の突起が形成され、組織は結合織の増生、著明な細胞浸潤を呈する。多数寄生例では、絨毛の磨滅を認めた。本研究は、宮崎大学芦沢広三教授、野坂大助教授の御指導をたまわった。深甚の謝意を表す。